

当院における悪性疾患に対する精子凍結保存の検討

今中 聖悟¹、貫井 季沙¹、森本 篤¹、徳永 誠¹、江原 千晶¹、道端 肇¹、小宮 慎之介¹
峯川 亮子¹、藤岡 聡子¹、井田 守¹、福田 愛作¹、森本義晴²
IVF 大阪クリニック¹、HORAC グランフロント大阪クリニック²

【目的】 癌治療の進歩により格段に生存率の改善が認められ、男女ともに妊孕性温存の需要は高まっている。近年、生殖医療部門を持たない近隣の総合病院から、当院への妊孕性温存希望患者の紹介が増加している。今回、当院での悪性疾患に対する精子凍結保存の現状について検討した。

【方法】 2006 年 1 月から 2018 年 7 月の間に、妊孕性温存を希望し他院より紹介受診した 76 名の男性患者を対象とした。

【結果】 平均年齢は 27 歳であり(13 - 60 歳)、疾患内訳は精巣腫瘍 24 症例 (31.6%)、骨軟部腫瘍 24 症例 (31.6%)、血液疾患 (白血病、悪性リンパ腫等) 14 症例 (18.4%)、その他の腫瘍 (大腸癌、肺癌、肝臓癌、前立腺癌、膀胱癌など) 14 症例 (18.4%) であった。原疾患に対して既に何らかの治療を受けた後に紹介された患者は 28 名 (36.8%) であった。精子凍結ができなかった患者は 4 名であり、72 名で凍結保存が可能であった (保存実施率 94.7%)。その後 ART 治療に凍結精子を使用した症例は 5 例 (凍結精子使用率 6.9%) であった。2018 年 7 月時点で 4 組が生児を得ている。2 組は ART 妊娠であり、2 組が自然妊娠であった。

【結論】 当院ではがん治療開始後の受診率が 36.8%で、国内における報告の 26.1-33.1%より高率であった。これは患者が同一病院内からではなく他病院からの紹介であったため、またがん患者のみならずがん治療医にも妊孕性保存の情報が不足していたため、と考えられる。ASCO の勧告ではがん治療開始前の精子凍結保存を推奨している。がんと生殖に関する情報が医療関係者のみならず社会に浸透すること、そしてがん治療病院と生殖施設の連携が、迅速な患者の妊孕性温存に必要不可欠であると考えられた。